

地域に寄り添った、  
真の復興支援を



町の中心部と離半島部の漁村で壊滅的な被害を受けた宮城県女川町。漁村の住民とも交流を重ねながら復興を目指す職員を訪ねた。

まちづくりの  
新たな目標

「まちづくりというのは、その土地の人々がどんな住まい方をしてきたのか、その文化・風習などを知ることが大切だと思うんです」

そう語るのは、女川町で昨年7月から復興支援に携わる久坂斗了だ。

これまで久坂は関西で、都市再生事業の計画を行ってきた。95年の阪神・淡路大震災の時には、出向先の豊中市で復興事業に携わった経験もある。

「阪神・淡路大震災の時は、道路など街の骨格は残されていたので、再建のために必要なスキームがはつきりしていました。また、都市災害だったのでブレインも大勢いました。しかし今回は、被災地の多くが漁村集落。都市からも離れており、識者・技術者が少ないことも大きな課題でした」

震災後、それに気付いた久坂は、「自分がやってきたことが、東北の皆さんの役に立つのなら、これも運命」と、被災地に向かった。「人が好きなので」と笑う久坂は新たな目標を見据えた。

伝統や文化を  
受け継ぐ住まいを

久坂は、町民課で災害公営住宅を担当することになった。着任当初は、人脈も土地勘もなかったため、思うように仕事が進まない。関西時代、たつぷりと経験を積ん



「番屋」で地元の方の住宅の構想に耳を傾ける久坂



海のほど近くにあるプレハブの「番屋」

でいたにも関わらず、根こそぎ骨格が奪われた女川では、まったくケースが違っていった。そこで久坂は、復興の手がかりとなる情報収集を独自に始めることにした。

そんな中で知ったのが、町の東の半島にある竹浦地区。山の斜面が海に迫り、わずかな平地に62戸の住宅があったが、残ったのはわずか2戸。187人の住民のうち11人が犠牲になったエリアだ。

「竹浦地区を何度か訪ねているうちに、高台に宅地を探していると、住民主導で移転や住宅についてのアンケートを取っていると知りました」

興味を持って、竹浦の住民と会話するようになった。久坂がこれまでずっとまちづくりに携わってきた人間だということが伝わり、次第に人々も心を開いてくれるようになったという。

竹浦の港では、地元の漁師が通りかかると、にこやかに久坂と挨拶を交わす。そのうち、仲間たちも自然と集まってきて、賑やかな井戸端会議が始まった。

「役場の肩書きではなかったのに、逆に自由に入り込んで意見を聞くことができたのかもしれない。そんな対話を通じて、地元の祭り、行事なども教えてもらったり。そ

れが、住宅やまちづくりのヒントになっていくのです」

女川町には行政区ごとに神社があり、それぞれに獅子振りが代々受け継がれている。竹浦の伝統的な民家は、縁側が広く、天井が高い。正月に獅子振りが舞いやすいようにだ。屋根は瓦ではなく、修復中の東京駅の屋根にも使われている石巻市雄勝の天然スレート。これは雄勝名産の硯の材料でもある玄昌石からつくられている。

「竹浦地区の災害公営住宅では、雄勝スレートを使いたいと考えて



かつての女川町中心部には、ビルの残骸が残る場所も



竹浦地区の海岸で、地元漁師と談笑する久坂

## Close Up 女川の記憶を次世代に残したい

女川出身カメラマン 鈴木麻弓さん

佐々木写真館3代目、鈴木麻弓さんが父の代役として女川の人々を撮影し始めたのは震災後の4月。母校である小学校の入学式からだ。人生の新しいページを記念に残してあげたいと女川へ。その日の子供たちは希望に輝いていた。

鈴木さんは女川町で2代続いた写真館の生まれ。モノクロのポートレート写真が自慢の父の元で育ち、自分もいつしかフリーカメラマンに。故郷を離れ、神奈川県逗子市を拠点に活動していた。そんな中、起こった東日本大震災。写真館は流され、両親は行方不明に。

「店は継がなくていいから、技術だけは継いでくれ」。かつて父から言われた言葉を思い起こし、父の遺志を受け継ぐべく、3代目を名乗る決意をしたのである。以来、逗子と行き来しながら、女川の人々をライフワークとして撮り続けている。

そんな女川の人々や町の風景を文と共に紹介した写真集『女川 佐々木写真館』が3月に出版された。

「この本は町内の新聞販売店にも置いてもらいました。地元の人を買ってくれば店の収入にもなります。こうして地域の経済を回していくことが大切だと思うんです。記念撮影の依頼も、地元の人たちが払える金額で仕事として引き受けます。20年後の町のあり方を考えるなら、地元の人々の気持ちになって、本当に役立つ支援が必要だと思います」

現在は工事関係者やマスコミも大勢女川に来ている。

けれども新しい町が完成した後はどうなるのか。

「私たちの世代が考えなければいけないこと。今、女川の30代・40代は本当に頑張っています。地域の中だけでは経済は成り立たない。港のそばで寿司屋を開いた友人もいるし、安心して買ってもらうため漁港に揚がる魚の放射線量を測定しているカマボコ屋もあります」

写真集に登場する人々の表情は驚くほど明るい。

「女川の人々は責任感が強くて世話焼き。いつも太平洋を相手にしているせいか、カラッとして前向きなんです」

だからこそ、遠慮は抜きに、観光目的でどんどん訪ねてほしいと鈴木さんはいふ。

「魚はおいしいし、根元から倒れたビルもぜひ見てほしい。丘に立てば、こんなところまで津波が来たのかと実感できます。被災時の話をしてくれる人もいますよ」

今、故郷を撮影に訪れるのは月に数回。次の時代へ向かって一歩ずつ立ち上がっていく女川の姿は、将来を担う子供たちにとって貴重な記憶となるに違いない。



phot by Tokumitsu Inagaki

**Mayumi Suzuki**  
1977年生まれ。カメラマン。震災後の女川を撮影し、昨年5月、ニューヨークでも個展を開催。  
www.monchicamera.com



漁港近くの水産加工場。現在はガレキ置き場になっている

©Mayumi Suzuki



海岸近くにあった八百屋を青空市として再開した岡さん夫婦

©Mayumi Suzuki



写真集『女川 佐々木写真館』(一葉社)



屋根・壁にも雄勝スレートが配された雄勝石ギャラリー。この建物も被災し、現在では土台が残るのみ

いるんですよ。文化を残しながら、少しでも住みやすい環境を提供したい、ずっとそう考えています。スレートを使えば、雄勝の産業の再生にも役立てるのではないのでしょうか」

### 地元の人々と識者を つなぐパイプ役に

久坂は女川町を拠点としながら、周辺の石巻市雄勝や牡鹿半島での復興の動きも見ています。牡鹿半島は「アーキエイド」という建築家による復興支援プロジェクトの拠点ともなっており、昨年夏には学

生100人を集めたサマーカーンも。大学教授などの勉強会も開催されており、これも久坂もネットワークを築こうと参加している。「まちづくりはきつかけが大切。地元の方々、市町村の職員、そして大学教授などの識者を連携させていく、いいパイプ役になればいいという気持ちからだ。」

「地元」に寄り添って生の意見を聞く。まちづくりにおいて、ともすれば忘れがちになる大切なことを、女川町に来て思い起こすことができた気がします。若い須田町長を筆頭に頑張っている人たちです。

3月1日に「女川町復興まちづくり推進パートナーシップ協定」が調印され、URが包括的に責任を持つサポートを行う体制が築かれた。4月からは7人に増員し、復興をさらに推進していく。「笑顔あふれる女川町」——復興計画に掲げられた目標に向かって、全力を注いでいく。



須田町長とかつちりスクラムを組む久坂と同僚の鈴(あぶみ・左)

ウニ、アワビ、カキなどの養殖も盛んだった美しい女川湾

町長が語る「女川の未来」

# 誇りと喜びとともに 千年に一度のまちづくりを

女川町長 須田善明さん

UR都市機構は、女川町と「復興まちづくりの推進のためのパートナーシップ協定」を締結し、離半島部を含む女川町全体の復興に向けて、総合的にサポートしていく。「全国一早い復興を」と誓う若きリーダーに、これからのまちづくりについて伺った。



須田善明 すだ よしあき  
1972年女川町出身。父は元町長の故善二郎氏。明治大学卒業後、広告会社勤務を経て宮城県議。2011年11月から現職。震災で家を失い、家族4人と仮設住宅住まい。趣味はロック鑑賞でドリームシアターに心酔。バンド活動も行いベースを担当。

## 将来を担う子供たちへ 背中で見たい

「復興に向かう私たちの背中を子供たちに見せていきたいんです。将来は、彼らがこの社会を背負っていくのですから——そんな決心を胸に、町の未来を見据え、復興に取り組んでいる、女川町長の須田善明さん。  
フレッシュで若々しい笑顔。長身が少しりした体軀から頼もしさを感じさせる、40歳を迎えたばかりの若きリーダーだ。

## 一歩ずつ歩み出した 復興まちづくり

須田町長の描く町の将来像は、「住みやすく」「訪れやすく」、その結果「住みたくなる」町。高台移転にしても、都市機能が集約されたコンパクトシティを目指す。「町の中心から1.5km以内に市街地形成が収まります。町の老若男女、観光などで町外から訪れた方々すべての動線が一体となる形を目指したい。また、この美しい女川の景観は私たちの財産。それをただ提供するだけではなく、訪れた人が景観を前に、自分で



景観という財産を生かしつつ、「コンパクトシティ」を目指す (画像はイメージ)

楽しみを創造できる空間づくりこそが必要だと思っています」  
復興まちづくりも一歩を踏み出した。肉体づくりもまちづくりも基礎が大切。土地の基盤整備は最優先。同時に住まいの早期確保も最重要課題だ。災害公営住宅は町内だけで550から600戸が必要となるが、早期に着手する先行復興エリアの約200戸はUR都市機構が担当する。

## 職員の心を折らせず ベストアンサーを

復興を実現するために、須田町長が日々心がけていることは、職員の士気を保つこと。  
「千年に一度の災害というなら、千年に一度のまちづくりなのです。家族や友人、家を失って傷ついていても、行政のプロとして復興に携われる誇りと喜びを感じてほしい。今回の復興は震災からの復興だけでなく、地域のこれまでの課題も含めた復興でなければいけない。我が町女川で、そのベストアンサーを示したいと思います」  
バイタリティあふれる須田町長。「二日も早く復興を目に見える形にしていきたい」と熱く語ってくれた。

## Close Up 活気を伝える新たな拠点に

### おながわコンテナ村商店街

昨年7月にオープンした「おながわコンテナ村商店街」が話題を呼んでいる。震災後、町にはコンビニエンスストアと小さな商店しか開店していなかった。そんな中、女川町商工会青年部が中心となりコンテナで商店街を開設した。現在では8店舗が営業中だ。

組み立て式のコンテナハウスは、NPO法人「難民を助ける会」から提供され、幅6m、奥行き2mほど。果物店、乾物店、洋服店、花屋などが軒を連ね、敷地の中央は椅子、テーブルが置かれたコミュニティスペース。地元の人々はもちろん、女川を訪れたボランティアや作業員の方々なども多数訪れる賑やかな交流の場になっている。

「仮設住宅に入っても商店がなくて困っている人もいます。売り上げは震災前の1/3程度ですが、コンテナ村のような場は必要ですよ」と語るのは、村長を務める果物店の相原義勝さん。震災前まで、「相喜会」という20年以上続く女川伝統芸能の獅子舞保存会で会長を務めていたが、津波で衣装や道具もすべて流出。19人いたメンバーのうち4名が亡くなった。それだけに、人の心をつなぐ場として、このコンテナ村にける思いは強い。

「これからは、外から来る人も楽しめるよう、イベントもやっていきたい」という相原さん。賑わいの復興に向けて、着実に歩みを進めている。



「私も今年で65歳。あと5年がんばって、若い人たちにバトンタッチしていきたいね」と村長の相原義勝さん



「今までより結びつきが深くなりました」と「がんばる女川」Tシャツを手にした洋服店の高橋さんと、隣に店を構える乾物店の青木さん



「前進あるのみです」と、花屋さんの鈴木さん。

●おながわコンテナ村商店街  
宮城県牡鹿郡女川町鷺神浜字堀切5  
営業：AM9:00～18:00